IS　～運命を切り裂く剣～

ジョーカーアンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～運命を切り裂く剣～

【Ｎコード】
Ｎ６２２０Ｚ

【作者名】
ジョーカーアンデッド

【あらすじ】
ＩＳを唯一使える男がいた。
運命を変えた一人の男がいた。
この二人が出会うとき、何かが起こる！
運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（前書き）

独自設定を、含んでおります。

まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

遠い昔、１万年に一度行われる『バトルファイト』と言われる自らの種族をかけた戦いが行われ、ヒューマンアンデッドが勝った。
その数百年後、再び、人々が彼らの封印を解き『バトルファイト』が行われた。
そして、怪人たちは戦いはじめ、人々をも巻き添えにしていった。
それを食い止めるために開発された『ライダーシステム』と呼ばれる物を使って、人々を守るために『仮面ライダー』と呼ばれる４人が立ち向った。

恋人の仇を打ち、おのれの恐怖心をも打ち勝つために戦ったギャレン。

邪悪な心に立ち向かうために戦ったレンゲル。

怪人から人間になるために戦ったカリス。

そして、人類を救うために戦ったブレイド。

『バトルファイト』も残り二人になった。

ギラファクワガタの先祖…ギラファアンデッド。

すべてを破壊する存在…ジョーカーアンデッド、もとい、カリス。

ギャレンは、ジョーカーアンデッドが地球を滅ぼすわけがないと彼を信じ、ギラファアンデッドに単身で立ち向かった。
そして、一斉にダークローチが世界に出てきた。

レンゲルは、それをやめさせるためにジョーカーに立ち向かったが、本能にあらがえずにジョーカーアンデッドがレンゲルを倒してしまう。

そして、残ったのは、唯一アンデッドを封印できるブレイドとジョーカーアンデッド。

だが、ブレイドは自らがアンデッドになることで『バトルファイト』に終止符を打たせなかった。

時は流れ、約２００年後。

篠ノ之束が作った『ＩＳ』は、世界に流通し始めたが、同時に戦争にも使われる可能性もあると疑い、『ＩＳ』の中心部であるコアを４２７個残し、行方をくらます。

ただ、『ＩＳ』は、女性にしか使えないということで女尊男卑になってしまった。

だが、女性にしか使えない『ＩＳ』を唯一使えた男…織斑　一夏がいた。

そして、裏では『亡国機業』が、全世界を征服するための準備をしていた。

彼らは、見事、『亡国機業』の悪事をつぶせるのか！

運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（後書き）

コメント、お待ちしております。

プロローグ2（前書き）

グダグダになってしまった。

しかも、まだプロローグだぁ！

束ちゃんのセリフもおかしくなった気がするぅ！

それでも、読みたい人はどうぞ！

プロローグ2

　ここはとあるラボ。
ここでは、男女2人がひっそりと暮らしていた。
ガシャ-ーーン……ウィーーーン……ガガッ、ガガガガ
そして、今、ここで作業をしている彼女…篠ノ之　束は、４２７個あるコア以外のコアを使って無人機の『ＩＳ』を作っていた。
「束ちゃん！夕食できたよ！」
「はーーい！いっま行っきまーす！」
そういって、束は、彼女を呼んだ男…剣崎　一真に駆け寄っていった。
「今日は、ハンバーグだ。」
「やったー！やったー！」
と、いい、彼に抱き着いた。
「わかった、わかった。」
そして、頭を撫でながら食卓へと向かった。

一真は、食卓でテレビを見てた。

「へぇ、男子が『ＩＳ』を使える…か。」

「あっ、ソースとって〜〜！」

「あぁ、わかった。それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。

男が『ＩＳ』を使えることってあるの？」

「ないない！あったら男装した人か〜、特殊な人間だね〜。

あっ！そうそう、そのことでさ、お願いがあるんだけどさ。」

「えっ？なに。」

久しぶりの、お願いだなぁ〜。と、思い、そのお願いを聞き入れることにした。

あまり、束からお願いされたことがなかったからだ。

「あのさぁ、いっくんの通ってる『ＩＳ学園』を守ってほしいんだけどいいかなぁ？」

「いっくんって、織斑　一夏のこと？」

「うん！そうだけど～！」

えっ、いっくんって一夏のことなんだ～。「あれっ、でもなんでいっくんなんて言ってるの？」なんて言ってみたら、「いっくんと友達なんだよ～。」と、言われ、大変なんだろうなぁ～と思った。

「で、なんで？また興味がわいたの？」

そう、篠ノ之　束は、興味がわいた人にしか話をしたことがほとんどない。

剣崎　一真も彼女にあることで気に入られ、彼女のラボに（強制的に）住むことになった。

「違う違う。まぁ、それも少しは理由に入るんだけど。

で、いっくんが狙われてるんだよ。亡国機業に。」

「亡国機業に。」と、言われたときに一真もタダ事ではないと思い真剣に聞くことにした。

「でも、何故、彼が亡国機業に狙われているんだ？」

そうだ。彼が狙われる理由がない。

なら、何故？

「たぶん、彼にもうすぐ贈られる『白式』が狙われてるんだと思うんだけど、『白式』は、戦闘能力は十分すぎるんだけど、テスト操縦者が乗った時は、ＩＳ適正が全員Ｃだったんだぁ。」

「で、その『白式』が、今度、『ＩＳ学園』に置かれることになったからってわけなんだぁ。」

「それで、その『白式』とその操縦者の織斑　一夏といっしょに守ってくれと。」

「そうなんだけどいいかなぁ？」

と、上目遣い＋涙目で言われた。

もともと、断るつもりはなかったため、無駄なんだが。

「行くから、元に戻っていいよ。」

「そうだと思ったんだよぉ！」

そういい、後ろからだしたのは、偽造した教員免許と札束を手渡した。

「なにこれは？特にこの免許なんだけど。」

「これは～、偽造した『ＩＳ学園』の教員免許、これで怪しまれずに学校に教師として行けるね。」

（偽造した時点ですでに怪しまれると思うんだが…。）

「あと、このお金は旅行代ね。守るのは良いけど、少しは、ゆっくりしてね～。」

「えっ！あっ、ありがとう！」

「じゃあ、今日は寝ようか。」

と、言い食べ終わった皿を台所に置く。

「わかった。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさーい！」

そして、夜は更けていった。

次の日、一真は自分のバイク、『ブルースペイダー』に乗り、『ＩＳ学園』に向かった。

プロローグ2（後書き）

コメントお待ちしております。

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？（前書き）

あぶねぇ！

ギリギリのところで剣崎出せた！

それでは、どうぞ！

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？

ここは、『ＩＳ学園』。

ここでは、ＩＳ操縦者を育成する場所である。

教師や例外を除いて、全員女子である。

そう、例外を除いて…。

（はぁ、なんでこうなったんだろう…。）

その例外の人物…織斑　一夏は非常に困っていた。

なぜなら、彼の周りは今は女子だけ。

これなら、反応に困るのも窺える。

では、何故、彼がＩＳ学園に行くことになったのか。

それは、彼の勘違いにある。

彼は、本来ならば私立藍越学園に行くはずだったんだが、試験会場を間違え、ＩＳ学園の試験機を動かしてしまったからである。

まったくもって、勘違い男である。

「では、自己紹介をお願いします。」

（どうしよう、気まずい空気だ。
この状況を打開しなきゃって思うけど、箒は助けてくれないし。
）

「…り…め君、織斑君。」

彼が、思考回路を巡ってる間に彼の順番が来たみたいだ。

「あの～、大声出しちゃってごめんね。
でも、“あ”から始まって、いま“お”なんだよね。」
「だから、自己紹介してくれるかな。」
「駄目かなぁ？」

そういって、お願いしてきたのは、山田　真耶先生だ。

「いやぁ、そんなに謝らなくても…。」

（チャンスだ！
自己紹介なら、この気まずい空気を変えられる。）
と、思ったのかいきなり立ち上がった。

「あっ、えっと、織斑　一夏です。
宜しく願いします。」

と、言ったとたん、後ろ、≪キラーン≫と言う感じの視線を感じた。

（なんか、悪いこと言っちゃったかな。
だが、ここで黙ってると悪いイメージというレッテルが張られてしまう！）

そう思い、強く息を吸い込む。

ほかのみんなが、見守る。

「以上です！！！」

言った瞬間、他の生徒は、ガクッと倒れた。

「え、あれ、だめでしt「ゴンッ！」ズゴック！」

理解できてないのか、説明しようとしたら頭上から拳骨がふってきた。

「うぅっ！いったぁ！って、千冬ねぇ」バゴン！

本日二回目である。

「学校では、織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「あぁ、山田君。

クラスへのあいさつを押し付けてすまなかったな。」

と、言って山田と交代したのは織斑　千冬だった。

（あれ？なんで千冬ねぇがここに？）

（職業不詳で、家にも数回しか帰ってこない俺の姉が…。）

そう思っていると千冬が自己紹介が始まった。

「私が、このクラスの担任の織斑　千冬だ。」

「君たち新人を1年で使い物にするのが私の仕事だ。」

自己紹介が終わった瞬間、教室が一斉に騒ぎ始めた。

「きゃー！わたし、織斑先生が目標できたんです。」

「あえて光栄ですーーーーー！」

「嫌いじゃないわーーーーーーーーー！」

「ったく。よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。
私のクラスだけに集中させているのか～？」
と、言い千冬は、頭を抱え始めた。

（千冬ねぇが俺の担任？）

「で、お前はあいさつも満足にできんのか？」

「千冬ねぇ、これはその…。」

「織斑先生と呼べ。」

「はい。織斑先生。」

再び教室がざわめき始めたので、「静かに！」と、一喝した。

「諸君らには、ＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。
その後、自習だが、基本動作は半月で体にしみこませろ。
わかっても、わからなくても返事をしろ。」

ハイ！

「では、教育実習生として、紹介しておく先生がいる、入れ。」

はい、と、言いドアを開けはいいてきたのは…。

「初めまして。剣崎　一真です。お世話になるかもしれませんが宜しくお願いします。」

そういい、剣崎は頭を下げた。

ついに、唯一Ｉｓを動かせる男…織斑　一夏と
運命を変えた男…剣崎　一真が出会った。

さあ、物語の幕開けだ！

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？（後書き）

コメント、お願いします。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物（前書き）

はぁ、またグタグタだ。

俺の体もボドボドだぁ！

眠いが寒いから冬眠しそう。

冬眠ではなく永眠しそう。

だが、書く。

では、どうぞ。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物

時間をさかのぼり、２時間。

ブゥゥ～～ン……キキィーー！

「ここがＩＳ学園かぁ～。
にしても大きいなぁ。」

そういって、バイクを止めたのは、剣崎　一真だ。

「どうやって入ればいいんだ。」

そういって、ちょうど女性が門番のようにいたので聞いてみた。

「あのぉ～、入らせてくれませんか？」

と、束からもらった偽造した教員免許を見せると、女性…織斑千冬は驚いた素振りを見せると、「ついてこい。」と言い、ＩＳ学園の中に入っていったので、一真も入っていった。

「単刀直入に聞くが、お前の持っているその教員免許、偽造した物だな。」

とある一室に入らされた後、そういわれた。

「ギクゥ！」

（もうばれちゃったよ、どうしよう…。）

と、思った一真は、必死に逮捕されないように抵抗した。

「違うんです！これは、そのぅ…。

そう！これはその手違いでして、

間違えてっていうか「もういい！通報はしない！」へ？」

なぜ？と思った一真だったが、次のことを聞いてしっくりきた。

「お前のことは束から聞いている。

近々、偽造された教員免許を持ってくる男がいるから、

保護してくれとな。

で、なにが起きたんだ。」

そういわれ、一真はこの前束に言われたことを話した。

「そうか、私の弟が狙われていると。」

「私の弟？それってどういう…？」

「おぉ、まだ言ってなかったな。

私の名前は織斑　千冬。

織斑　一夏の実の姉だ。」

（えぇーと、なんか見たことあるなぁ。）

「あっ！思い出した！そういえばテレビで見たことがある！
確か、『モンドグロッソ』で優勝しｔ「うるさい！」…すみませんでした。」

「で、なんで束はこんなはしゃぐ男を送り込んできたのか分からん。」ハァ＝３

「まぁ良い。あいつが選んだんだ。少しは手ごたえがあるか。」

（すごい言いぐさ…。）

「ところで、次からその偽装した教員免許を持ってくるのもいろいろと面倒だからな。」

「この教員免許を使え。」

と、言って出したのは『ちゃんとした』教員免許だった。

「これは？」

「次からはこれで、学園内に入れ。
一生他の教師にばれないという保障はないからな。
これなら、半永久的に教育実習生としてここに来れる。」

（前言撤回！やさしい人だった！）
と、心の中で涙ぐんでいた一真だった。

「では、今日から教育実習生として来てもらうぞ。」

「わかりました！って今日から！？」

「黙って来い！」

本日二度目だ。

「すいませんでした。」

こうして、彼の教員実習生生活が始まった。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物（後書き）

今度は、『仮面ライダー龍騎』と『とある科学の超電磁砲』をクロスしよう。

コメント、宜しくお願いします。

金髪女王／怒鳴った怪物（前書き）

金髪、登場します。

剣崎、怒鳴ります。

作者、永眠しそう。

だが、執筆します。

金髪女王／怒鳴った怪物

休み時間。

教室では一真と一夏が話していた。

「勉強ついていけてる？」

「いやぁ、難しすぎて、全然わかりませんよ。」

「だよなぁ～。最初は難しいもんなぁ。」

「でも、頑張りますよ。」

「意気込みは、完璧だｎ「ちょっと、よろしくて？」……え？。」

と、いった、たわいのない話をしていると2人の後ろから髪は金色でロールがかかっている少女が現れた。

見た目的には、白○ルナと似てるといったら似てるのかもしれない。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、

それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「「誰（ですか）？」」

「はい～～～！？
私を知らないと？
あなたは、良いとして、教育実習生である剣崎先生まで。
いいですか！私の名前はセシリア・オルコットですわよ！」

「「ふ～～ん。」」

「絶対バカにしてるでしょ！
覚悟しなs「キーーンコーーンカーーン！」この恨み、あとできっちりつけますわよ！
あとで覚悟しなさい！」

そうして、彼女は去って行った。

「では、ただいまの時間をクラス対抗戦にでるクラス代表を決める時間にします。」

と、山田が言った。

すると、即座に数人が手を挙げ、その全員が織斑君がいいと言ってきた。

そうしたら、セシリアがいきなり立って言った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「何で、納得がいかないんだ。セシリア・オルコット。」
と、めんどくさそうに千冬が言ってみた。
「そのような選出は認められませんわ！
大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！
わたくしに、セシリア・オルコットにそのような侮辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏が、立ち上がって反論しようとしたが、一真がそれを制した。
「そもそもですわｎ「いい加減にしろ！」…！」
いきなり怒鳴ったのは、一真だった。
「それ以上言ってみろ、オレハクサマヲムッコロス！
それに、ここは、いまお前のわがままを言う時間じゃない！
正々堂々と相手と戦ってから言え！」
どこぞのロリコンライダーの迷言を言いつつ、セシリアに怒鳴った。
その後ろでは、彼を見直したのか、なぜか誇らしい笑みを浮かべた千冬がいた。
そして、頭を冷やしたのかセシリアが言った。
「そうでしたわね。

剣崎先生の言う通りですわ。
このセシリア・オルコット、一夏さんに正々堂々と決闘を申し上げますわ。」
「あぁ、臨むところだ！」
こうして、剣崎の教育実習生活1日目が、終わった。

金髪女王／怒鳴った怪物（後書き）

コメント、お願いします。

決闘開始／決着と異形の怪人（前書き）

熱をひいてしまった。

とにかく、だるい。

剣崎が、ほとんど出ない。

だが、書く！

決闘開始／決着と異形の怪人

決闘当日。

一夏とセシリアが準備をしていた。

一真は、彼が守る対象でもある、『白式』が届いたというのですぐさま、向かった。

「おい、剣崎。」

「なんでしょう、織斑先生。」

「あれが、お前が守る『白式』だろう。」

「そうです。
でも、僕が守るのは一夏君や白式だけじゃありません。
この地球上のあらゆる人々を救いたいんです。
たとえ、この身に何が起ころうとも。」

「頼もしいな。
だが、一人で抱え込もうとするな。」

「わかってるつもりです。」

「2人とも～。
一夏君がスタンバイ終わりましたよ～。」

「わかった、山田君。

行くぞ、剣崎。」

「ハイ。」

こうして、決闘が始まった。

「最初に言っておきますけれども、
正々堂々と戦わなければ、
私の小間使い。
いえ、奴隷にしますわよ。」

「上等だ！」

そう言い終えると、いきなりセシリアがビームライフル…スターライトｍｋＩＩＩをぶっ放すと、白式に直撃し、何とか持ちこたえたが、立て続けに撃ってきた。

それからは、一夏の防戦一方だった。

「さあ、踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

何とか、手で防御しているが、シールドエネルギーが徐々に少な

くなっていく。

「装備…装備…って、これだけかよ！
まぁ、素手よりかはいいか！」

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型で挑もうなんて…正気ですの！？」

と、言いながら撃つが、一夏はコツをつかんできたのか難なく避ける。

「このブルー・ティアーズを前にして初見で、
こうも耐えたのは貴方が初めてですわね。
褒めて差し上げますわ。」

「そりゃどうも。」

「でも、そろそろフィナーレと参りましょう。」

すると、周りからも撃たれるようになり、よけきれなくなった。

「左足、頂きますわ！」

だが、よけられた。

「イチか、バチか！」

そういうと、銃弾をよけ、下から上に上昇した。

「うぉぉぉ！」

近ずけたとき、剣を振りかざすが後ろに後退し、よけられる。
「むちゃくちゃしますわね！
でも、無駄なあがきですわ！」
周りからも、セシリアの銃弾が撃たれるが、一夏はわかったように言った。
「わかったぜ。
こいつらは、お前が命令しないと動かない。
しかも、そのたびに、お前はそれ以外の攻撃ができなくなる。」
「それは、意識を集中させてるからだ、そうだろ！」
「残り2機。
あとちょっとだ！」
「わかりましたわ。
4機だけではありませんのよ！」
「しまった！」
セシリアの放った、ミサイルが当たる。
「えっ！
まさか、ファーストシフト！
あなた、今まで初期設定で戦っていたとでもいうのですか！？」
「よくわからないが、これでやっと俺専用になったみたいだな。」

「あぁ、もう面倒ですわ！」

「見える！」

その瞬間、周りの機体を破壊し、一気にセシリアの乗るブルー・ディアースに接近する。

「おりゃーー！」

そして、自身の武器…雪片弐型で斬ろうとするが、いきなり、シールドエネルギーが切れ試合終了のブザーが鳴り、「勝者、セシリア・オルコット。」とアナウンスが言う。

それもそのはず、雪片弐型はシールドエネルギーを使い斬る刀だ。

そして、唖然とした顔でつったている2人のところに、何かが落下してきた。

「危ない！」

そういい、自らも一緒にセシリアを押し、その場から逃げる。

「なんだ！？」

と、言い2人は落ちた場所を見る。

すると、そこには一体の異形の生物が立っていた。

決闘開始／決着と異形の怪人（後書き）

コメント、お待ちしております。

決着の少し前／ターンアップ！！！（前書き）

やっと、剣崎を変身させました。

少し、セシリアにフラグを立てました。

あまり、きれいにフラグを立てられませんでしたが。

次回は、セシリアとの共闘です。

決着の少し前／ターンアップ！！！

決着がつく、少し前。

「テスト操縦士が動かしたとき、ＩＳ適性が全員Ｃだったのが嘘みたいな動きだな…。
山田先生、一夏君のＩＳ適性を見せてください。」

「はい、剣崎先生。
えぇーと、彼のＩＳ適性はＢですね。」

「そうか、ありがとうございます山田先生。」
（だから、ＩＳ適性Ｃ以上の動きができるのか。
それに、白式も一夏君が初めてとは言えすごい戦闘力。
狙われるのもわかる気がするな。）

「あと、ちょっとで決着がつきますね！
織斑先生！」

「そうだな、山田君。
だが、あいつ、時々、手を開けたり握ったりしているだろう。
そうしてるときに限ってあいつは、失敗をするんだ。」

「よく知っていますね。
やっぱり、兄弟だからでしょうか。」

「ふん。」

ブー！ブー！勝者、セシリア・オルコット。

「ほらな。」

「そうですね、では、迎えに行ってk「ドカーーーン！」キャッ！」

爆音が鳴り響き、軽く地震が起きた時、真耶が倒れそうになったが、一真が受け止めた。

が、ちょうどお姫様抱っこのようになってしまった。

「大丈夫ですか！山田先生！」

「は、はい！ですが、少しこのたいせいは、ちょっと…。／／／」

「す、すみません！」

「なに、のんきに漫才をしている！
今の状況を見ろ！」

「はっ！
で、なにがあったんですか？」

「何か、落ちてきたみたいだ。
フィールドの中央に人型の何かがある。
拡大してみる。」

すると、そこには異形の怪物が立っていた。

「あれは…！」

「なんだ剣崎、知ってい「今すぐ、生徒を避難させてください。早く！」…わかった。
山田先生。」

「ハイ！」

「聞いていただろう。今すぐ生徒を避難させろ。」

「わかりました！」

「剣崎は、「行かせてください！」わかった。
そのために、お前はここにいるんだろ。」

「ありがとうございます。」と、言いながら彼はフィールドに走って行った。

「なんですの、あれは！」

彼女の眼には、落ちてきた異形の怪人…トライアルEがいた。
一夏は、シールドエネルギーがないのでセシリアが遠くに置いてきた。

「ですが、彼には殺気が感じられますわねぇ。
私が倒してあげますわ！」

と、言いスターライトｍｋＩＩＩを撃ち、それは直撃した。

「やった！」

彼女は、勝利を確信したが、つかの間。

なんと、トライアルＥは無傷のまま立っていた。

「なんですって！？」

すると、トライアルＥは、自身の右腕にあるアームガンを連射してきた。

とっさのことだったので、バリアも張らずに手で顔をガードし目を閉じた。

しかし、いつまでたっても痛みは来なかった。

「えっ。」

目を開けた時、彼女の前にいたのは、自身の剣…『ブレイラウザー』を持ち、銃弾をすべて叩き落としていた。

「セシリア、大丈夫か。」

「ハイ。」

「じゃあ、ミサイルを2発ほど、撃ってくれ。
あいつは、攻撃されているときは防御に専念していたからな。」

「わ、わかりましたわ。」

そして、セシリアが2発ほど撃ったところで一真がセシリアの手を持ち、一夏と同時になるべく安全なところに避難させた。

「これから、どうするんですか？
剣崎先生。」

「俺が、あいつを倒す。
お前たちはここから離れろ。」

「でも、先生はＩＳが使えないのでは。」

「大丈夫だ。
俺は、あいつらを倒すためにここにいる。」

「で、でも1人じゃ「一夏！」千冬ねぇ「織斑先生と呼べ！」はい。」

「聞いていただろう。
今すぐ、避難しろ。」

「でも、彼は、「避難しろ！」…ぐっ！」

「平気だ、一夏君。
俺は、負けない。
それに、一夏君やセシリアちゃんや他の生徒がいるこの学園を俺は壊させない。
だから、行ってくる。」

「じゃあ！私も行かせてくださいまし！」
「でも、セシリアちゃん！」
「まだ、シールドエネルギーは残っています！
それに、いくらなんでも一真さん1人で任せられませんわ！」
「…優しいんだな、セシリアちゃんは。」
「…／／／／そ、そんなことありませんわ／／／／。」
「わかった。
でも、遠くからの応戦だけにしてくれないかな。
怪我でもされたら、責任とれないから。」
「分かりましたわ。」
「一夏君は、ここに残ってくれ。」
「でも…！「シールドエネルギーが0だろ。」うっ。」
「平気だ、勝って見せるから。」
「わかりました。
勝ってきてくださいよ。」
「わかってるって。
じゃあ、行ってくる。」

そして、一真とセシリアは、トライアルEのもとへ行った。

「待っていてくれたんだな。
ちょっと、下がっていてくれないか、セシリアちゃん。」

「わかりましたわ。」

「俺は、学園を守る。
そして、みんなを守る。
俺は、俺は仮面ライダーだ！」

そういい、ベルトを腰に巻き、左腕を腰の位置に置き、右腕を手のひらを自分の方へ向けた状態で
左斜め前方へ移動させ、高らかに叫んだ。

「変身！！！」

決着の少し前／ターンアップ！！！（後書き）

コメント、お待ちしております。

戦闘開始／お姫様抱っこ！？（前書き）

戦闘部分むずぃ。

今日は、これから、病院だぁ！

では、どうぞ。

戦闘開始／お姫様抱っこ！？

「変身！！！」

そう一真が叫んだ瞬間、目の前の空間に投影されたオリハルコンエレメントを通り抜ける。

すると、そこにいたのは一真ではなく、紺色の戦士…仮面ライダーブレイドがいた。

「剣崎先生も、ＩＳを…。」

「行くぞ！セシリアちゃん！」

「今は、そんなこと考えても仕方ないですわね。
わかりましたわ！剣崎先生！」

そう言って、一真…ブレイドはトライアルＥのもとへ駆け寄り、セシリアはスターライトｍｋＩＩＩでブレイドに当たりそうな敵の弾丸を打ち落とす。

ブレイドは、トライアルＥに近づくとおもむろにスペードの７…Ｍｅｔａｌ　Ｔｒｉｌｏｂｉｔのカードと、スペードの３…Ｂｅａｔ　Ｌｉｏｎのカードをラウズした。

ピピッ！『ＭＥＴＡＬ』『ＢＥＡＴ』

と、ブレイラウザーが言い、体が鉄のように固くなり、右手にパ

ワーが宿りパンチをトライアルＥに放った。
トライアルＥがおびんだ隙にブレイラウザーで切り付ける。
すると、トライアルＥはブレイドから狙いを変えたのか、今度はセシリアに向かって銃弾を撃ちだした。
セシリアは、スターライトｍｋＩＩＩを撃つが数発しか撃ち落せず、そのまま、トライアルＥの弾丸はセシリアに迫ってくる。
「キャア！」
『ＭＡＣＨ』
セシリアは、痛みに耐えるために目を閉じた。
だが、いつまでたっても痛みは来なかった。
「えっ？」
目を開けると彼女の前に彼女が当たりそうになった弾丸をすべて代わりにうけたブレイドがいた。
「剣崎先生！」
「平気平気。
それより、アイツの動きを止めてくれるかな？
決着をつけるから。」
「え、えぇ。

でも、あまり止められませんわよ。」

「大丈夫。
セシリアちゃんが頑張るんだったら、
俺は、それに答えるから。」

「わ、わかりましたわ。／／／／」

「じゃあ、いくよ。」

「ハイ！」

そういい、セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを数発トライアルＥに撃つ。

それは、全弾命中。

トライアルＥが動きを止めた瞬間、ブレイドがトライアルＥの懐に潜り込み、スペードの２…Ｓｌａｓｈ　Ｌｉｚａｒｄとスペードの６…Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｄｅｅｒをラウズした。

『ＳＬＡＳＨ』『ＴＨＵＮＤＥＲ』『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｌａｓｈ』

その瞬間、ブレイラウザーは１．５倍の切れ味になり、雷を宿した。

「ウェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェイ！」

「グギャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーア！」

ブレイドは、懐を数回斬ると、トライアルEは叫び声を上げながら絶命した。

セシリアは、ブルー・ティアーズを解く。

（す、すごい…！

少しの隙で、あの怪物を…。）

そう考えていると、前から「セシリアちゃん？」と、いつの間にか変身を解いていた一真がいた。

「け、剣崎先生。／／／／」

「さぁ、みんなのところに帰ろう、セシリアちゃん。

みんな心配してるよ。」

「は、はい！

剣崎先s…つぅ！。」

「ど、どうかしたの！？セシリアちゃん！？」

「ちょっと、足を切ったみたいですわね。」

「大変だ！
ちょっと待ってね。」

そういうと、一真はセシリアをお姫様抱っこをした。

「え？／／／／」

「これなら、セシリアちゃんが歩かなくても平気でしょ。」

「えっ、ですが、これはちょっと…。／／／／」

「はいはい、けが人は静かにしなきゃねぇ。」

こういうやり取りが、一夏たちのところまで続いた。

戦闘開始／お姫様抱っこ！？（後書き）

コメント、お待ちしてます。

説明会／彼の目的（前書き）

年末年始には、風邪を治らせなければ。

では、どうぞ！

説明会／彼の目的

トライアルEを倒した後、

一真が、セシリアが怪我をしていたので、彼女をお姫様抱っこしながら保健室へ運ぶ途中、千冬と若干驚いている一夏に会い、明日、今日の事を保健室にいるセシリアのところで、話すことをが決定した。

次の日、

保健室には、セシリア、一真、一夏、千冬の４人が集まっていた。

「で、昨日のことについて話をするんだけど、何か質問はあるかい？」

「「ハイ！！！」」

「じゃ、じゃあ最初は、一夏君から。」

「あの怪物はなんですか？」

「あの怪物ってトライアルEのことか…。」

「「トライアルE？」」

「剣崎、それは私も気になっていたことだ。話せ。」

「言われなくても…。
トライアルEとは、トライアルシリーズの中の1体だ。
昔、広瀬義人が作っていた人間データとアンデッドの細胞を合わせて作った実験体だ。」

「ちょっと待ってくださいまして。
アンデッドとは一体何ですの？」

「あぁ、そうだったな。
アンデッドとは、1万年に1度行われるバトルファイトだ。
彼らは、自らの種の繁栄を賭けて戦っている。
以前のバトルファイトではヒューマンアンデッドのおかげで人類の繁栄が成り立ったわけだ。」

「ということは、剣崎。
私たちがこの世界にいられるのは、そのヒューマンアンデッドのおかげだというのか？」

「その通りです。」

「あと、剣崎先生。
あの剣崎先生の姿はなんですの？
あれは、ISですの？」

「あれは、ISじゃないよセシリアちゃん。
あれは、ライダーシステム。
アンデッドを封印するためのものだ。」

すると、今度は、一夏が疑問に思ったことを聞いた。

「封印っていうと？」

「アンデッドは、細胞のひとかけらまで消し去らないと不死身だ。だから、それを一定のダメージを与えて封印しなければならない。」

「で、あの戦闘で使ってたトランプみたいなカードは？」

「あれは、アンデッドを封印したカードだよ、一夏くん。封印したアンデッドの能力を使って、変身したり攻撃したりするんだよ。」

「へぇ、でも、なんで剣崎先生が？」

「あぁ、俺は適合率が高かったから。ＩＳもそうだろう？適合率が高くなければ使うことができない。」

「で、でもいきなり戦えって言われたら戸惑うでしょ。」

「それが仕事だったから。それに、その仕事に誇りだってあった。それを通して、初めての友達を作れたし、仲間だって作れた。」

「怖いけど、優しい上司。牛乳好きな、小説家見習い。頼りがいのある先輩。仲間のために戦った後輩。そして、無愛想だったけど、人類のために戦った親友。」

「だから、この仕事を続けられたんだ。」
それを聞いた2人は感動した。
「へぇ、すごいなぁ。」
「そうですわね。」
「で、なんでその剣崎先生がここにいるの？」
「それは、君を守るためなんだ。
一夏君。」
「お、俺を！？」
「そうだ。
今は詳しく言えないけど、君はとある組織に狙われている。
だから、それを防ぐために俺はここにいるんだ。」
「そうだったの！？
千冬ねぇ「織斑先生と呼べ。」…織斑先生は知ってたのか？」
「あぁ。」
「なら何でおれに！「お前に言うと、いつも単独行動をとろうとする。それに、勉強にも集中できんだろ。」うぅ…一里…ある。」
「じゃあ、これで終わりだ。
このことは、他の生徒には内緒にしてもらえるかな？」

「「わかりました。」」

「では、これにて解散！」

説明会／彼の目的（後書き）

コメント、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6220z/

IS　～運命を切り裂く剣～

2011年12月28日21時40分発行